

八戸から発信する学び ～食・歴史・文化～

コーディネーター：瀬尾 知子（秋田大学准教授）
話題提供1：齋藤 信哉（八戸市教育委員会教育長）
話題提供2：岡本 潤子（学校法人千葉学園 千葉幼稚園園長）
話題提供3：馬場 豊樹（妻神えんぶり組 親方）

【企画主旨】

八戸市は、国内外に誇る豊富な水産資源、文化的地域資源を有しており、地域固有の資源を大切に、それを活用しながら子どもの学びが展開されている。本シンポジウムは、八戸市教育委員会と国立研究開発法人海洋研究開発機構（JAMSTEC）が共同で行っている「海洋STEAM事業」、八戸市出身の羽仁もと子氏の教育理念に基づいた「暮らしに生きる教育」の実践、国の重要無形民俗文化財に指定されている「八戸えんぶり」における「世代間交流と子どもの教育」について、深くかかわってこられたシンポジストから話題提供を行っていただく。

八戸市から、地域における子どもの教育、子どもの健やかな環境づくりとその未来について考えていきたい。

「正解のない問い」を考える学びへの挑戦 ～八戸発「海洋STEAM教育」の試み～

齋藤 信哉（八戸市教育委員会教育長）

新型コロナウイルスの猛威は記憶に新しいところであるが、国内あるいは世界各地で発生する未曾有の自然災害や国際紛争、そしてAI技術の驚異的な発達を見るに、私たちはまさに「予測困難な時代」を生きているのだと実感させられる。人々の価値観が多様化する中、この予測困難な時代には「正解」というものがない。よって、これから生きる子どもたちにとって必要な学びとは、この人間社会が抱える様々な問題に真正面から向き合い、明るい未来を築くために「正解のない問い」を考え続けていくことだと言える。

八戸市教育委員会では、令和5年度よりJAMSTEC（国立研究開発法人海洋研究開発機構）と共同で「海洋STEAM教材」の開発に取り組んでいる。STEAM教育とは、科学・技術・工学・数学にリベラルアーツを加え、教科等横断的に問題発見・問題解決の力を育成するものである。これまでに作成した教材は、「1巻 海の生き物と環境の変化」「2巻 海洋プラスチックとわたしたちの生活」「3巻 海の地震と防災 海底下の地層」であり、JAMSTECのウェブページ等で公開されている。これらの教材は、小・中学校で理科や社会科等の学習内容と関連させながら、主に総合的な学習の時間において教科等横断的に扱うことが想定されている。

例えば、2巻では、プラスチックの大量廃棄は確実に環境汚染につながるが、我々の生活から全て排除することは不可能、という「正解のない問い」を提起している。本教材の開発や学校での活用は、まさに「正解のない問い」を考える学びへの挑戦である。

JAMSTEC 海洋STEAM
教材ライブラリー
(<https://www.jamstec.go.jp/steam/>)



羽仁もと子と千葉クラの教育思想から 現代の教育を考える

岡本 潤子（学校法人千葉学園 千葉幼稚園園長）

「故郷」は生まれ育った場所であると同時に各人の心を支える場所であるともいえるが、貴学会令和6年度の開催地「八戸」は、市民性が豊かな地域であると自慢している。その根底を支える文化の側面である「教育」を考えるにあたり、東北の田舎町である八戸という小さな町に生まれ育った姉妹の姿がある。姉は明治6年生まれで日本人女性初の新聞記者、ジャーナリスト、大正10年に東京・目白に自由学園というユニークな学校を創設し「素人の教育」を貫いた教育者羽仁もと子であり、もう一人は羽仁もと子の実妹である三歳年下の千葉クラである。クラは寒村であり貧しい地であっても女子にも教育が必要であると明治43年に現千葉学園高等学校の前身である裁縫女塾を八戸に開校。くらしに生きる教育を今も実践中である。八戸に生まれ育った姉妹が、それぞれの地に学校を創り、両校共に100年を超える歴史を有することに意義があろう。二人の共通点は「教育は生活」であり、「学校が一つの社会」として生き成長することを実践し続けたことにある。

現代社会は情報が拡散し、その勢いにより教育の姿が見えづらく、わかりづらくなっているが、羽仁もと子の教育論は、幼い子どもから年代を重ねたその年代それぞれの生活を通して語りかけるものがある。令和の新しい時代であるからこそ、「生活即教育」であることの意義を参加者と共に紐解き、こどもをまんなかにした教育実践のために八戸から社会へ何を発信するか、参加者と共に考える機会としたい。

杓と教育 — 八戸えんぶりの継承を支える子どもたちへ —

馬場 豊樹（妻神えんぶり組 親方）

青森冬の三大まつりの一つでもある「八戸えんぶり」は、国の重要無形民俗文化財に指定されており、田畑の土をならす農具「えぶり」にその名が由来する、豊作を願う八戸地域に伝わる郷土芸能である。例年、2月17日から20日にかけて開催され、長者山新羅神社への「奉納」から始まり、八戸の中心街で30数組が一斉に舞を披露する「一斉摺り」や明治期に建てられた豪商の旧家で観る「お庭えんぶり」など、様々な催しが行われる。えんぶりの象徴ともいえる烏帽子をかぶった「太夫」の頭を大きく振る独特の舞いである「摺り」や、可愛らしい子どもたちが主役となる祝福芸は、観客を魅了し、毎年必ず訪れる観光客も少なくない。(Visit はちのへ HP https://visithachinohe.com/stories/enburi_schedule/ より一部抜粋)

八戸市是川にある妻神えんぶり組は、嘉永7年(西暦1854年)に糠塚えんぶり組に弟子入りした組である。2024年に170周年を迎えた。5枚烏帽子のどうさいえんぶりで、御前えんぶりに指定されている。太夫による演目と子どもたちによる「松の舞」等の祝福芸を合わせて、今ある12の演目を継承していくとともに、歴史の流れに合わせて、進化を続けながら組の演目を絶やすことなく守り続けていく想いで活動している。現在、組員数は、約60名で、その中の約30名が大学生から未就学児である。

「地域の大人が地域の子どもたちを育てる」という恵まれた環境が八戸市に存在し続けてきた。子や孫のように年齢の幅を越えた信頼関係を通して、子どもの自己肯定感を醸成し、非認知能力を伸ばす

ことにもむすびついていると言える。幼稚園や学校で接することのない大人から褒められる、励まされるといった無形の教育は、生まれ育った郷土を誇りに思う子どもたちの心の大きさを点から面に広げる可能性を持っている。



(Visit はちのへ Youtube, 10分)